

西宮歴史調査団ニュース 第8号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662-0944 電話 0798-33-1298

竜吐水、精いっぱい働いた！

衣笠周司（竜吐水班）

はじめに

竜吐水というのは、江戸中期から明治にかけて使われた木製の消火用ポンプのこと。いまも各地の博物館やお寺などに現物が保存されている。だが実際にこれを使ったという人たちは100歳前後になっているはずだから、体験を聞くことは、まずできない。

そこで竜吐水が活躍していたときと、やがて衰退していったころの実情を、当時の新聞報道などから探ってみた。



写真1 竜吐水（西宮市立郷土資料館蔵）

1. 竜吐水、賊を走らす

「表戸を破って入って来かけた泥棒の顔めがけて、竜吐水の筒先を向け、力まかせに弾くと、狙い違わず賊の顔へ礫のように水が飛び、不意打ちに驚いた賊は、ほうほうの体でそのまま逃げ去った」（当時の新聞記事を意識、一部略＝以下同じ）。

こんな話が大阪朝日新聞に載っている。明治19年（1886）10月24日夜12時過ぎ、大阪市東区粉川町の酒小売商店で起きた泥棒退治の話である。この記事から、当時は竜吐水が商店にも備えられていたことがわかる。この竜吐水は、火災の消火のためではなく、臨機応変に賊退治に使われ、それが成功したということで、面白くて痛快な記事になっている。さらにこの記事はあとに続けて「また来るかもしれない。もし来たら、もう一度おどかしてやろうと寝もせず待ち構えていたが、ついに来なかった。何よりの幸せ」と結んでいる。

2. 竜吐水を買いそろえて

「この節、道頓堀の各劇場に夜更けに放火しようとする曲者が、しばしばおるようだ。そのため幾らかの金額を募って当直人を増やしたり、竜吐水を買備えるなどして、嚴重に警戒しているという。こんな悪事を企てるのは実に憎むべき徒というべし」＝明治13年（1880）6月6日付大阪朝日新聞。

この記事によると、用心のため竜吐水をわざわざ買い求めたというのだから、明治13年当時では、竜吐水は“頼れる存在”だった。これにまさる消火器はまだ世には出回っていなかったのだろう。

従って商売もいろいろある中に「竜吐水屋」という店が成り立っていたことも、次の紙面からわかる。

明治12年（1879）6月1日の大阪朝日新聞の3面に物語が掲載されていて、その中で「四ツ橋筋の吉野屋橋南入ルの竜吐水屋とやらへ養女にやられ」というくだりがある。その「竜吐水屋」さんは「その後、絶果て」たことになる。その当時は、物語の舞台に自然に登場するような商売だったのだろう。

3. 桶から火が出た！

つぎは大阪朝日新聞・明治20年（1887）5月28日朝刊の記事。

四天王寺の境内に、俗に將軍樹と呼ばれている大きな桶の老樹があつて、根元の周囲は約6間もあり、まるで岩石のようだ。洞穴のような虚（うろ）があり、聖徳太子が戦いのとき、ここに身を潜めたと伝えられている。昨日午前2時過ぎ、この虚から火が出た。夜番の者が『火事よ、火事よ』と叫んだので、寺や茶店の人たちが集まり、竜吐水などで消防に力を尽くしたが、火はますます盛んに燃え上がる。斧で桶の朽ちたところ2カ所に穴を開け、ここから虚をめがけて竜吐水の水を注ぎ入れ、ついに8時ごろ消し止めた。

当時の竜吐水の消火能力がこんなものなのかと、推測できそうな記事である。

4. 竜吐水は、いつから？

『消防団百二十年史』によると、竜吐水は宝暦年間（1751～1764）にオランダから渡来したものとも、長崎でオランダ人の指導で作られたものとも言われている。「雲龍水」というものもあるが、竜吐水を改良したものだと言われたり、両者には明確な区別はないと言われたりする（本稿では区別していない）。いずれにしても桶で水を運んで本体に給水し、ホースがなくて筒先だけなので、放水してもせいぜい15mくらいだったという。

東京では、明治17年（1884）に竜吐水に代わって、



写真2 雲龍水（滋賀県高島市 マキノ資料館にて）

消防本署に蒸気ポンプを配備し、各消防分署にはドイツ製腕用ポンプが備えられた。「腕用ポンプ」は吸管とホースが装備され、27mくらいまで放水できる。明治3年（1870）に英国から蒸気ポンプとともに輸入されたが、当時は高額であり、ポンプ操作に慣れず十分利用できなかった、と同書は記している。

5. 出初式から竜吐水が姿を消す

東京では明治17年に新型ポンプに交代したというが、実情として竜吐水はいつまで使われていたか、その後の記事をのぞいてみよう。

明治23年（1890）1月5日付の東京日日新聞は、前日に行われた消防の出初式の模様を伝えている。

「各消防組は午前7時に打ち出した総出の半鐘で所轄分署に集まり…上野公園不忍池畔に…整列、儀式」ののち「『掛け水』…『始め』のラッパで…地上に向け九十余台のポンプが、いつとときに水勢激しく放水」と報じている。この時の消防ポンプは「蒸気ポンプ及び腕力ポンプ」と明記、竜吐水は姿を消している。

ところが、明治31年（1898）3月31日付の東京朝日新聞には「竜吐水」が記事の中に出てくる。「昨日午前11時35分、京橋区佃島東町の鮮魚店から出火。…消防具は古風の竜吐水ぐらいなので、みるみる延焼。…そのうち警視庁の蒸気ポンプがいち早く」駆けつけ「追い追い集まった各署の普通ポンプおよび消防組の…ポンプ十台余」が尽力したので、たちまち下火になったという。

ここでは「古風の竜吐水ぐらい」ではダメ、という書き方になっている。「普通ポンプ」との違いや「消防組のポンプ」の形式がどんなのだったかは書かれていない。でも明治17年の新機種投入から14年も経っているのに、東京でも竜吐水がまだ使われていたことが、これでわかる。

6. 大阪・京都の竜吐水はいつまで？

『消防の歴史四百年』によると「すでに宝暦4年（1754）に大阪で竜吐水が発明され普及されて行った」ことになっている。『大阪消防の歴史』をひもとくと、安永8年（1779）ごろの項目に「竜吐水」の文字が散見できる。そして寛政12年（1800）ごろには平野屋藤兵衛らが「万竜水」売り出しを願い出たり、別人からも「龍起水」「鮮竜水双竜水」などの売り出しを願い出たりしている。

『明治大正大阪市史』には明治5年（1872）6月に、唧筒（そくとう＝ポンプ）掛を8人置いたことが出てくる。「当時は未だ手押唧筒のみが用いられたが、17年…英国製蒸気唧筒1台を購入」と記されている。

京都では天明7年（1787）の「火事場道具」のお達しの中に「一町に竜吐水5」を備え付けるよう命じている。明治22年（1889）3月に「新京極大火」があったが、33戸が全焼し約2時間で消し止めた。「鎮火に至る約2時間という速さは、明治17年末にそれまで消火に使用していた竜吐水から輸入ポンプをモデルにした国

産製ポンプが使われるようになったことも関わっていると考えられる」という岡彩子さんの論文が『京都歴史災害研究』に掲載されている。

7. 神戸の状況を見ると…

では神戸ではどのような状況だったか。次のような火事の報道がある。

「一昨夜12時少し前、本町通り4丁目、袋物商の2階から黒煙が出て…見ていた人々が口々に、火事よ、火事よと呼び立てながら、各々手に手に手桶などを手当たり次第に持ち出し、われ先にと同家に駆け入り、2階へ水を注いだため、ようやくのことで消し止めた。そこへ消防夫らも追い追いに駆けつけ、一緒に消防に手を尽くした」=明治19年（1886）7月19日付又新日報。

同紙は8月13日付でも、居留地49番館の出火の記事を載せているが、「居留地の消防隊は一番に駆けつけ…警察署付の消防隊も出張して大いに尽力した」が焼失した、という書き方になっている。

このように報道記事では「竜吐水」がなかなか出てこない。

でも『神戸市史』によると明治4年（1871）に県庁が兵庫町会所に「西洋竜吐水1台をも下付せし」とある。同14年（1881）4月の消防組員配置改正のときは「神戸警察署管内に…唧筒2台、兵庫警察署管内に…唧筒1台を備ふる」ことにした。ここでは「唧筒」と「竜吐水」と使い分けているので、新型ポンプへの移行を思わせる。また『神戸市会史』には明治30年（1897）に「従来林田村で使用していた第2号ドイツ型ポンプ1台」が神戸市に寄付されたとの記載がある。

そこで明治30年の又新日報で出初式の記事にも当たってみたが「各消防組は…警察本部などを回り、梯子乗りの技芸を演じ、正午湊川堤防に至り、暫時休憩のうえ、ここから分裂し…思い思いに得意回りをなしたり」と、一斉放水のことは出てこない。放水していれば新型ポンプが見られたのに、と思う。

『神戸市史』は、さらに、明治16～25年（1883～1892）の10年間で「焼失坪数の多きは19年の3200坪、焼失戸数の最も多きは同24年の約200戸」と記している。まだ竜吐水と唧筒が入り混じっていたころだろうか。

8. 西宮の竜吐水は？

西宮市関係を見てみよう。

『西宮町誌』によると明治維新前から同町の消火の任は浜仲仕組衆が当たっていたというが、明治20年（1887）に消防組が公設となって「用具服装の整頓」をし、大正15年（1926）現在では「消防用ポンプ3台（ガソリン1、腕用大小2台）を備へ」と記録されている。『大社村史』では大正12年（1923）に自動車唧筒（ポンプ）1台、蒸気唧筒1台、腕力唧筒2台を導入したとの記録が出てくる。

『名塩史』では「明治初年のころは…各部落に竜吐水を備え」ていたが、「明治43年（1910）には手押しポンプ2台を購入」、「大正12年（1923）にガソリンポンプも備え付けた」と記されている。

なお尼崎では、大正から昭和初期まで腕用ポンプが主体だったと記録にあり、それまでは竜吐水主体だったと推測される。

9. 地方では、まだまだ竜吐水

上記以外の各府県での竜吐水の活躍状況はどうか。次の記録を見ると明治31年から44年ごろの様子がわかる。

まず明治31年（1898）5月14日付の東京朝日新聞。

「堺市住吉通り1丁目、硫酸晒粉製造株式会社で11日午前1時30分ごろ同社第3、第4鉛室より発火」の火事で

「警察官、消防夫とも全力を尽くして消防に及んだが、いかんせん同市には旧式ポンプがわずかに1台あるだけで、ほかは竜吐水を使用してポンプを補助するくらいなので、火勢は食い止めようもなく」焼失してしまったと報じている。

大阪近辺の都市でもまだ竜吐水が使われていることがわかるが、大火には役立たないような表現となっている。

明治34年（1901）2月19日付の東京朝日新聞によると、16日午後10時ごろに起きた相州（神奈川県）三浦郡三崎町での大火報道の中で「▲消防具の不整頓」の見出しで次のように記している。

同町の近在は漁村にして海近く、…火災を予期しない土地なので、消防具はまったく不整頓にして、ポンプのごときも多くは旧来の竜吐水に過ぎなかった。ここでは多くの竜吐水が残っていることがわかる。だが、それでは消防道具が「不整頓」だとしている。

次は明治44年（1911）5月10日付の東京朝日新聞の記事。

「8日午後5時22分ごろ、山形市七日町の料理店・東京庵より発火し、旅籠町に延焼して山形新聞…など主な建物を焼失」した。詳細の中で「▲消防の不備」の見出しで別稿記事として次のように語らせている。

「山形は消防の設備がまことに不完全です。蒸気ポンプは全市中にたった1台あるだけで、あとは残らずこれですからなと、竜吐水を上下する真似をして…」とある。ここでも役立たずだとされている。

このほか各地の消防署などのホームページで竜吐水から腕用ポンプに変わる様子がみられる。

花巻市では明治31年4月に私財で腕用ポンプを導入した。それまでは竜吐水だったのだろう。個人の尽力で早期に新鋭機が装備されたわけだ。

高松市は腕用ポンプを昭和初期から中期まで、川崎市は昭和3年（1928）から35年（1960）まで使用とある。昭和中期まで竜吐水主体だったのだろう。



写真3 町中に残る火の見櫓（上大市分団）

10. 東京も郡部には竜吐水が340台

明治39年（1906）8月6日付東京朝日新聞には、東京の消防設備について次のような数字が記載されている。

◆市内は消防署を始め、ほかに6分署を設け、消防士27名、消防機関士9名、雇員3名、消防機関手148名、同調馬手28名、消防手1389名、火の見番9名、消防組数40、同出張所7、常備詰所3、分遣所76

消防器具は、蒸気ポンプ8、腕用ポンプ57、水管馬車14、水管車135…など。

◆郡部の組織は、町村消防組数474、組頭449人、小頭3173人、消防手31869人。消防器具は、蒸気ポンプ1、腕用ポンプ474、竜吐水169、雲龍水171、水管車48…など。

これを見ると、東京市内（当時）では竜吐水の記載はなく、蒸気ポンプ、腕用ポンプが配備されているが、郡部では「竜吐水」「雲龍水」が340台も配備されている。「もう竜吐水なんか」という報道がされているのに、である。

11. 竜吐水が笑いのネタやおもちゃに

明治37年（1904）1月1日付東京朝日新聞にいたっては、竜吐水を笑いのネタとしている。いわゆる「三題噺」として次のやりとり。

「…あの、担いで行くへんてこな箱のようなものは、ありやなんだ」

「…古物保存てんで、竜吐水てえもんで、今のポンプと同じものサ」

「ハハー、昔はあんなものを使ったんか?…」

「……」

お笑いの次は、おもちゃの話。

明治44年（1911）6月28日付の東京朝日新聞に「夏の玩具として子供に喜ばれるのは…水を使って遊ぶ種類の物で、木製の竜吐水だの噴水器などは7月の下旬から飛ぶように売れ初める」と書かれている。

さらに昭和12年（1937）にも「最近の水遊び玩具」として「昔からある竜吐水の水鉄砲やバケツ類は今でも…限らない魅力がある」と記事に出ている。=昭和12年7月29日付東京朝日新聞。

そういえば、2017年に開かれた「神戸みなと時空」展（KIITOで1月25日～12月28日）でも、おもちゃの「雲龍水（竜吐水）」が展示されているのが目に付いた。

12. 竜吐水を実際に見た人、操作した人

『尼崎消防のあゆみ』（1986年）によると佐川吉太郎さん（当時87歳）は、10歳のとき工場大火に遭遇した。「消防は、その竜吐水を荷車に積んで火事場まで引っ張って走って行ったもので、現場に辿りつくまでに30分も40分かかりました。竜吐水は放水量、放水距離ともに少なく、消火するよりも燃えつきてしまっ

たという感じ」だったと思い出を語っている。

昭和14年（1939）6月27日付東京朝日新聞の記事では、消防功労者として6月26日に表彰された3人が、竜吐水時代にも勤務しており、そのころを偲んで、こんなふうに話している。

小川幸吉さん（当時75歳）は「17歳から56年間消防にいます。…竜吐水といわれたものを使った頃から吉原や神田猿樂町の大火では随分活躍したもんです」と話す。

榊太郎吉さん（当時69歳）は「51年と8カ月の長い消防生活でした。ポンプも竜吐水から手押しや、蒸気ポンプの時代を経て、今日のカソリンポンプになったので、いざ火事だというと石炭をカマドへ叩き込み、それをガラガラと馬が曳いて駆け付けたこともありました」と話している。

平井亀吉さん（当時75歳）は「私が初めて消防になったのは18歳のときで、あの頃は機械らしい物はなにもなく、ただ体だけを水にぬらして、あとは腕と体力で揉み消したものです」と語っている。

竜吐水からの消防器具の変遷を体験として語っているのが貴重だ。とくに平井さんの話は、竜吐水は消防士の体に水をかけるのに使ったものだ、と言われてきた話を裏付けているようだ。



写真4 勢いよく放水される現在の消火活動
（昭和62年 安来市）

13. 戦争で竜吐水が復活？

最後に、昭和14年（1939）7月21日付東京朝日新聞の防空演習の記事を読んできたい。

「スワ空襲！、帝都の護りもいよいよ高潮に達した防空訓練第3日目の20日午後4時30分――突如唸りだした空襲警報のサイレンを合図に山の手屋敷町の奥様連で組織された“女ばかりの消防隊、が…猛火を相手に、銃後女性の頼もしさを展開し、この日の防空訓練を華々しく彩った」との出だしで「…御自慢のポンプ隊も部署に着いた。もうもうたる煙を衝いて梯子隊が屋根にかけのぼる。『オイッチ、ニツ、オイッチ、ニツ』ソプラノとアルトのかけ声も勇ましく、放射する竜吐水の飛沫が美しい虹を描く。」

この当時までに、「竜吐水」はごく初期の消防器具で、ほとんど消火には適していないということが示され、機種交代も終わっているはず。それが突然この性能の悪い竜吐水を引っ張り出してきて、奥さま消防隊に「これで空襲に備えろ」という。こんなところにも戦時中の理不尽さが読み取れそうに思える。

1 4. 竜吐水を評価すれば…

竜吐水は江戸中期から用いられ、その当時としては唯一の消火用の器械であった。だが操作性も機動性も乏しいものだった。したがってその評価が低いことがわかる。

『消防団百二十年史』では「ぼや程度の火災には役立ったとは言え…消火能力はほとんどなく」と記述されている。そして「竜吐水の位置から直接見える所しか狙って放水できないので、注水による直接消火にはあまり役立たなかったが…鳶たちの刺子に水をかけるのに有効な援護注水で、火消したちの士気を大いに鼓舞したと言われている」と効用を記している。

また消防防災博物館のウェブサイトによると竜吐水は「燃えている家並みの反対に水を向け、屋根の上にいる纏持達に水をかけ、これによって焼き残すという寸法で」竜吐水を使っていたことを錦絵から読み取っている。

しかし『町火消たちの近代』によると、文久3年（1863）に江戸城西の丸炎上の際は、20台以上の竜吐水を運び込み消火した。破壊消防ができないときに頼りになるのは、何ととっても竜吐水で、それが威力を発揮したという。

このように、竜吐水は性能不足と言われてもこれしかなく、当時における「最新鋭」のものであった。庶民の知恵も加わって、いろいろと活躍をしていただろうことが、本稿で明らかになったのが、なによりと思われる。竜吐水が精いっぱい活動した実情を、ここでは記録として書きとどめておきたい。

◆参考文献◆

- ◇『大阪朝日新聞』（1879～1887年）
- ◇『東京朝日新聞』（1887～1939年）
- ◇『又新日報』（1886～1896年）
- ◇『大阪毎日新聞』（1890～1893年）
- ◇『東京日日新聞』（1890～1893年）
- ◇『消防団百二十年史』日本消防協会（近代消防社）2013.3
- ◇『消防の歴史四百年』魚谷増男（全国加除法令出版）1965
- ◇『消防100年史』藤口透吾・小鯖英一（創思社）1968
- ◇『町火消たちの近代：東京の消防史』鈴木淳（吉川弘文館）1991.11
- ◇『大阪市消防の歴史：大阪市消防発足20周年記念』（大阪市消防局）1968.3
- ◇『明治大正大阪市史』第1巻概説編（大阪市）1933.5.30
- ◇『神戸市史』本編各説編（神戸市役所）1971.6.20
- ◇『神戸市会史』第1巻明治編（神戸市会事務局）1968.12.1
- ◇『西宮市史』第2、3巻（西宮市役所）1960.3.25
- ◇『西宮町誌』（西宮町教育会）1926.1.30
- ◇『大社村誌』（大社村誌編纂委員会）1936.7.10
- ◇『名塩史』（財団法人名塩会）1990.11.30
- ◇『尼崎消防のあゆみ・郷土防災100年史』（尼崎市消防局）1986
- ◇『江戸・東京の地震と火事』山本純美（河出書房新社）1995.10
- ◇「竜吐水から科学消防へ」清水功（『科学朝日』29巻8号）1968.8
- ◇「燃える都と燃えない民衆」岡彩子（『京都歴史災害研究』第7号）2007.3
- ◇（公財）日本消防協会ホームページ
- ◇消防防災博物館ホームページ
- ◇その他各市ホームページ、ウェブサイトなど

西宮歴史調査団は、団員に登録した市民が主体となって、西宮市内の文化財を調査し、記録を作成する文化財調査ボランティア活動の団体です。西宮市立郷土資料館が主催しています。

西宮歴史調査団ニュース 第8号 平成30年（2018）4月14日